

折口信夫の「柿本人麻呂」を通じた民俗理解の過程について

高橋 史弥

一、はじめに

折口信夫は『口譯萬葉集』（一九一六年）や『萬葉集辭典』（一九一九年）を著し、万葉集研究を進めたことだけからでも、万葉の時代への深い理解がうかがえる。折口はその著作等の中で万葉集やその時代に言及する際、様々な人物を取り上げているが、本稿ではその中でも「柿本人麻呂」への言及に注目した。これを折口が民俗を理解するために使用した「用語」として捉え、歌自体の評価についてはなく、人麻呂の表現や、同時代の歌人との比較、人麻呂が宮廷詩人として活躍したことや、その置かれていた環境、さらにその時代の他界観や呪言への言及を整理してみる。

このために、『折口信夫全集』を使用し、①折口の柿本人麻呂の理解について、②柿本人麻呂を通じた他界や呪言の見方、について抽出し、それを時代順に整理することで、論の推移を確認した。

まず、折口が柿本人麻呂について言及したのははじめのものが、「萬葉談義―日竝知皇子尊の宮の舎人等の歌―」（一九〇九年）である。この中で折口は、日竝知皇子の死去の際に、舎人が作ったと伝えられている二十三首に対して疑いを持ち、これが人麻呂の手によって作られたものだと書いている。そしてその理由を、「人麿式用語・人麿式句法・人麿式修辭法」が盛んに用いられているからとして論を展開している。一九〇九年の時点で、折口の人麻呂の歌を熟知し、人麻呂の歌か否かを判別できるという自信がうかがえる。折口は舎人が作ったとされる

二十三首の前に人麻呂が作った、「日竝知皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麿作歌」があり、これが哀傷の感情だけではなく、殯宮で多くの人が歌うために作られたものだと解釈している。二十三首通じて歌の様子を見ると、岡宮天皇の御陵を舎人等が守りながら歌ったと考えるのが正当であり、人麻呂の長歌は、殯宮で歌ったもの。この短歌二十三首は、陵の前で歌ったものと言えるという。二十三首は名歌で、全体に統一して一貫した色彩があると言え、必ず一人の名人によって歌われていると考えられ、それが人麻呂であるというのだ。

万葉集の文献を批判できる点から、折口はこの一九〇九年の時点で、柿本人麻呂の歌をよく理解していたことが分かる。加えて、単に歌の鑑賞にとどまらず、その歌が殯宮や陵などで多くの人が歌うために作られたものであったという、古い習俗を考える根拠にしようと試行している様子がうかがえる。

次に、折口の日記からは、作者ごとの格付けを試みようとしている気配が見える。

「日記」大正五年五月七日（一九一六年）全集三一

萬葉も家持になつて模倣に弊れて行きつまつてゐる痕があり／＼と見える。さうして静観の目を内外に開き出した時に、寂しい力□□ながら不朽の命を貽す歌が残された。人麻呂や憶良を張つてゐる家持の歌を見ると、その空威張や生命のない文章にうんざりする。

後に述べるが、折口は柿本人麻呂を高く評価している。その評価は、柿本人麻呂が、歌作りに優れていたことのほかにも、歌を作る上での重要な決まりを作っていたことなどを踏まえている。一方、この日記に

見える大伴家持や、同時代の歌人を批判している著作も見られる。とにかく、作者ごとの優劣をつける試みからは、折口の万葉の文学への徹底した分析と理解があったことが確認できる。

『萬葉集私論』(一九一六年九、一〇、一二月)では、宮廷詩人に関する資料が残っていないことを把握している様子が見える。

宮廷詩人の資料が残っていないことは、当時の社会制度の中で宮廷詩人がごくあたりまえにある階級であり、その生活に対して注意を引くものではなかったためとしている。そして、こうした宮廷詩人により、「ある種の挽歌・頌徳歌・讚宮歌・宴歌・労働歌・無縁の死者を弔ふ歌」が作られたと考えている。

折口の初期の論考等からは、万葉の時代の歌人への態度や、宮廷詩人の生活、儀礼に用いられる歌への考えが現れていることが確認できる。また、万葉の時代の詩人の評価や、柿本人麻呂が作った歌であることを論証しようとするのに加えて、すでに作られていた歌の意味が、皇族を悼むために多くの人に供するためのものだったなど、古い習俗にまで広がっていることが分かる。この時点で、万葉集を史料として扱い、これを通して民俗を追跡しようとする試みがあったことが指摘できる。こうした中には、『萬葉集辞典』等、柿本人麻呂について簡潔に解説したものもあり、重要な資料となる⁽²⁾。

なお、先述の通り本稿では、各歌の鑑賞に対する言及には触れない。仮にこうしたものを踏まえれば、岡野弘彦(二〇〇〇)が言うような、折口の歌人に対する具体的な評価などが見えてくるであろう。ただ、今回は、上記のように折口が民俗を理解するために、柿本人麻呂用語として、どのように活用してきたのかを確認することに専念した⁽³⁾。

二、折口の柿本人麻呂理解

(一) 柿本人麻呂について

折口信夫が柿本人麻呂をどのように理解し、論を展開させていたのかを確認してみる。

まず、折口は、人麻呂を「ほおまあと」呼び、詩形に改革を促したと考えられている。

「相聞の發達」(一九二六年頃) 全集一

古墳の多い奈良南郊に本貫のある柿本氏は、遊部・ほかひに何の關係もないか。私は、人麻呂を「ほおまあと」にして、更に詩形に改革を促したものと考へてゐる。ほかひの家元とも言ふべきよご部・ほかひ部の伴造^{トモツクリ}ではないか。柿本氏が倭朝廷の遊部、又は「吉言部」^{ヨコトベ}から出たとすれば、極めて意味のあることになるのだ。私は、人麻呂が、山陰の西、中國を歩いて居るのは、ほかひびとの足跡の及んで居た一部を示すものかと思ふ。

ほかひびとの間に、文藝の才の優れた者が續出するうちには、敘事詩としておもしろいものゝ新作が出来て来るであらう。宅守相聞の如きは、單に文人意識ある有識者の手で作られたものと言ふより、ほかひびとの補綴によつてなつた「組み歌」なること、ずつと後世の世阿彌の如き専門家の手で出来た、意識的に舊敘事詩を改作・補綴したものではないかと思ふのである。

右の假説は、今は眞の假論に止るであらう。併し、宅守・茅上相聞の歌が、創作詩でないことだけは考へねばならぬ。

折口は、古墳の多い奈良南郊に本拠のある柿本氏が遊部やほかひに關

係があり、柿本氏がほかひの家元といえるきよごと部・ほかひ部の伴造ではないかと推測している。そのうえで、人麻呂が山陰に赴いたことは、ほかひどとがここまで進出していたことを示すと考えている。そして、ほかひどとの中から文才の優れた者が出てくるうちには、おもしろい新作の叙事詩ができてくるだろうと言っている。ほかひどとが、祝言を述べつつ諸国を巡り歩いてきたからこそ、宅守相聞などをほかひどとが古い叙事詩を改作や補綴することにより成立させたものだったのではないかと考えているのである。ただ、この段階で折口には確証はなく、仮説にとどめておくと言っている。それでも、宅守や茅上相聞の歌は創作詩ではないと考える必要性を指摘している。折口は、人麻呂が詩形に改革を促した人物であると言い、それが柿本氏がほかひの家元と言うべき伴造の位置にあったことが、基盤となっていると考えているのである。

こうした人麻呂に対して、人々の持ったイメージは、「雑体ならびに述懐歌―古今和歌集(三)―」(一九三二年度の途中―一九三三年度)で述べられている。ここで、ある人によると人麻呂の詠んだと考えられなかった、

あづさ弓 磯辺の小松。たがよにか 万代かけて、たねをまきけむ (巻一七、九〇七)

を提示して、名高いと言われる歌の中には、柿本人麻呂の歌でないと思われるようなものでも、人麻呂の歌とされているものがあるとしている。それは、人麻呂が万葉集編纂の時代には、もう歌の神のようになりかけていたからだと言う。そのため、歌そのものは、とぼけたようなものでも、人麻呂のものとしてとされてしまったのだと説明している。

折口は、「曾根好忠―拾遺和歌集(三)―」(一九三二年度の途中―一九三三年度)で、歌集の編纂方針により、歌を詠んだ人物が代えられてしまっていることもあることに言及している。

万葉にある「柿本朝臣人麻呂歌集」と、現存の柿本集とは別物であることに着目し、万葉では人麻呂と関係のない歌まで載っていると指摘している。平安朝の歌集では他人の歌を入れることもあり、それは万葉の歌集の編纂の態度が、この時代に移ってきていたからだとしている。万葉の家集では、まだ作者の名前は書いているが、平安になると、名前が書かれていないものになる。そこで、他人の歌がその人の歌のようにとられてしまうのだという。群書類従の柿本集と、続国家大観の柿本集では歌もところどころ違う点も指摘している。ただ、こうした違いが出ることなどが悪いことだとはしていない。柿本集は尊敬されて長くいじられてきたので発達したと言い、中期以後の家集は、柿本集と猿丸集の二つの歌集によっているとしている。折口は、万葉の頃の家集の編纂方法と、それが平安時代に受け継がれていったこと。その結果、後世、歌が尊敬され、いじられるようになり、中期以後の家集の発展につながっていくことを解説している。

人麻呂の功績について述べたものは、「歌の話」(一九三〇年一月)である。

折口はここで、人麻呂が神として祀られる程の尊敬をうけるように評価されたのは、長歌を作る力が非常にあったためとしている。それとともに、短歌を作る力もあり、人麻呂の力で、短歌が盛んになったと言っている。人麻呂の死後は、良い歌であれば人麻呂の歌として万葉集に載り、本当に人麻呂の歌か分からないものもあると述べている。

一九三五年の「短歌の歴史」では、人麻呂が宮廷の歌作りだったこと

から、昔からのしきたりや形式を踏まえた形式で歌を作っていたため、古典的で堂々としていると評価している。

「短歌の歴史―萬葉から現代まで―」（一九三五年八月七日）全集二一

飛鳥時代は短歌のもつ内容も形式も、はつきりして来て、それからだん／＼、盛んになつて、奈良朝に入る。そしてこの時代の代表歌人として柿本人麻呂と高市黒人を擧げることが出来る。

歌人として有名であるといふことは名高い歌を作つた人といふことで、その時代の人の生活にふれてゐた爲名高いので、つまりその時代の人の持つてゐる歌の目的の條件になつてゐるのである。とかく時代が過ぎると價値を失ふものであるが、いゝものはどの時代でもいゝ。歌の目的は時代によつて異なるけれど、この二人は後の時代にも生きられた。特に黒人は最近まで忘れられてゐたが、それはこの人の歌をよみこなす人がなかつた。

人麻呂の歌は内容より形式である。これは人麻呂が宮廷の歌作りであるから、昔からのしきたり、形式を踏んで新味をつけたから古典的で堂々としてゐるが、どうも眞實味が缺けてゐた。しかし人麻呂はどんな場合でもその形を變へて歌を作り、そこへ新味を注入した。まう一人忘れてならぬ歌人として奈良朝の初めに山部赤人がある。この人の歌は次の平安朝の歌へ多くの暗示を與へてゐる。赤人は模倣の上手な人で、後年個性を發揮したが、却てその方が悪かつた。これに反し、黒人の歌はがつちりした中にしみ／＼と人の心に觸れて来る。山はないが健康である。人麻呂は感情的・敘景的で、黒人は敘景的であるといへよう。

人麻呂は新しい味をつけていると評している。一方で、歌についての人物評もしており、山部赤人は模倣はうまいが、後年個性を出したあまり、かえつて悪くなつてしまつたことなどを言つてゐる。黒人との比較では、黒人が敘景的であるのに対して、人麻呂は感情的であり敘景的であると評している。

また、人麻呂の歌集の編纂について具体的に述べてゐるのは、「家集と物語と」（一九三八年一―三月）である。

猿丸大夫集、現存の人麻呂歌集を例に取り、これはその人物の歌だけを加えたものではないとする。それは、最初は家集であつたのが、だんだんに成長し、人麻呂歌集にいたつては、平安朝のものまでが入つたといふ。家集を写していつた人が、自分の考えで色々な歌を収容することになり、他人の歌も入つていくようになる。そうすると、人麻呂など、人物の名を借りて、新しい歌集ができてくるということも述べてゐる。万葉集はまた別であるが、歌集において、人麻呂でない人物の歌が人麻呂のものとして流れていく流れについての、一つの答えを提示している。

柿本人麻呂についての小括

折口の人麻呂への理解は、まず詩形に改革を与えた人物として評価している。これは、人麻呂は長歌に優れていただけでなく、短歌を發展させたことから分かり、その功績が、人麻呂が早い段階で神として祀られるほどにしたと言つてゐる。ただ、こうしたことから、良い歌は人麻呂が作ったと言われていることもあり、歌集には人麻呂が作つていないものでも、人麻呂が作ったものとして載せられているものもあると言つてゐる。

(二) 人麻呂の表現

折口は、「萬葉びとの生活」で、儀式のための歌について述べている。時を定めた神事が、あり来たりの詞曲を使っているのに対し、宴飲歌・挽歌などはその場に應じた物を作らなければならなかったと、その性質の違いを述べている。折口は、このための宮廷詩人がいて、皇室・皇族の儀式に詞章を作り、大歌所に授け、節づけさせたものであると考えている。人麻呂などの歌に挽歌・賀歌・宴飲歌・行幸從駕歌など大人数の唱和に適したものがあることから、宮廷歌人としての性格が見えてくるという。この作物は飛鳥・藤原・奈良時代初めに多く出て、天平前後から数は減ってきていると言いつつ、人麻呂の時代に盛んだったことを指摘している。その理由を、雄大な詞章を作る人がいなくなったことや、目で見える文学として歌を作る方に進んで来たためであるとしている。天皇や皇族の儀式に供するという詞章の作物から、天平時代には歌が目で見える文学としての形に変化していることを読み取っている。

「萬葉びとの生活」(一九二〇年一月) 全集九

大歌の詞章は、誰が創作するのか。雅樂寮の職員の名目を見ても、曲譜の傳承や、節づけの事に與つてゐる人ばかりで、詞章を作る人は見えぬ。さすれば、全く大昔から傳へた記・紀に見えた種類の詞曲ばかりを反覆して居たものかと思ふと、決してさうではない。定例の神事は、あり来りのものを使つて居ても、宴飲歌・挽歌などは、其場合に應じた物を用ゐねばならなかつた。此爲の宮廷詩人が居て、皇室・皇族の儀式に適當な詞章を作つて、大歌所に授けて節づけさせたものと思はれる。人麻呂・赤人等の作物或は、人の爲に代作した物と思はれる歌に、挽歌・賀歌・宴飲歌・行幸從駕歌など、多人

數の唱和に適したものゝ多いのも、此等の人が大歌謠ひの爲に、其歌詞を創作することを、爲事にしたことを見させてゐるのである。併し、さうした作物は、飛鳥・藤原時代から、奈良の初めに多く出たが、天平前後からは、非常に減つてゐる様に見える。唯時時の即興を謠ひ上げた位の物が關の山である。此は雄大な詞章を作る人がなくなつた上に、目で見える文學として、歌を作る方に進んで来た爲である。けれども尚、宮廷專屬の職業詩人が、全く盡きて了うた訣ではない。笠ノ金村の如きは、其最後の人と思はれる。但、段々短篇になつて来た爲に、職業詩人を俟たずとも、素人の作でも間にあふ様になつたといふためであらう。

一九二六年になると、人麻呂の譬喩を使った表現上の功績を取り上げている。

「日本文章の發想法の起り」(一九二六年一月) 全集一

譬喩表現をとり入れてからは、枕詞や序歌は非常に變化して了うたが、元は單純な尻取り文句の様なものであつたのである。其が内容と關聯する様になると、譬喩に一步踏み入る事になる。忽ち對句の方で發達した譬喩表現に壓倒せられて、姿は易つて了うたが、でも玉梓・玉梓タマシヅと言へば、道・使を聯想したのは、譬喩にばかりもなりきらなかつたのである。驅使ハセシカヒに役せられた杖部ハシカヒの民の持つたしるしの杖を棒カマと言ひ、棒の木地から梓シヅと言うたのである。かうしたものは、段々なくなつて、純粹譬喩に傾いたのが、主として人麻呂のした爲事であつた。死んだ一様式を文の上に活して来たわけである。

枕詞や序歌は、元々単純な尻取り文句のようなものであったという。それが、内容と関連する譬喩を使用するようになり、その譬喩も対句表現として發達した譬喩に変わっていくことになる。譬喩になりきらなかつたものもあり、こうしたものは純粹な譬喩に傾いていく。こうしたことを人麻呂が成し遂げたと言っているのである。

人麻呂の歌の特徴についても考えを進めている。「萬葉集の解題」では、人麻呂の歌の作り方を解説している。

「萬葉集の解題」(一九二六年五月) 全集一

世が複雑になり、人の感情が細かになると、現在以上の歌を要求して大歌を創作する様になつて、宮廷詩の行はれる機運が起つた。是は日本の古い書物を見ると、大體、古い飛鳥の都、即、舒明天皇・皇極天皇の頃からはつきりと現れて來るやうである。其機運が熟して來た爲に、柿本人麻呂の如き人が、出て來たものと思はれる。つまり、作者自身が、其感情になつて、宮廷或は貴族の感情を想像して代作するのである。

日本では、自分の欲求から歌を作ると言ふよりも前に、先づ代作の歌が行はれてゐる。即、古くは、自分の感情を歌として現はす必要がなかつたのである。團體とか、或貴い人の感情を、下の臣が代つて謡うたのである。感情表現の歌と言ふよりも、昔から傳へられた形式一偏の物でよかつたのである。かうして居る間に、一方に於て有力なものが働きかけて、自分自身で歌を作る動機が、發生した。即、抒情詩を生み出す機運に向つて來たのである。だから、萬葉集に見えて居るものゝ中で、奈良朝以前の歌は、代作の歌が多いと思つてよい。萬葉集を見ると、此傾向が、ひどく力強くあらはれて居

る。其が、代作の時代から眞の抒情詩を産み出した天才歌人人麻呂を、一時に飛躍させる原動力になつた。人麻呂の抒情詩は、今日見ると、代作と稱して居ないものでも、代作的のものが多し。

舒明天皇・皇極天皇の頃、世が複雑になり、人の感情が細かになると、現在以上の歌が要求されたという背景を述べている。こうした時代に登場したのが人麻呂で、宮廷や貴族の感情を想像して代作をしていたとしている。このように、日本では自分の欲求から歌を作るのではなく、代作の歌が行なわれていて、自分の感情を歌として表す必要が無かつたのだと言つてゐる。こうした状態から、自分自身で歌を作るようになり、抒情詩を産み出す機運に向かつてきたと言つてゐる。折口は人麻呂を「天才歌人」とまで言つて、代作の時代から眞の抒情詩を生み出したと評價している。人麻呂の作物には代作と言つていけないものでも代作的のものが多しといふ。

同講演の中で、折口は人麻呂が短歌を固定させ、人々に意識させるようになったことの功績も挙げてゐる。

短歌が固定したのは、藤原の都の時代、即、人麻呂の頃である。短歌をして明らかに人々に意識させる様になつたのは、人麻呂の功績である。

短歌の現れた原因は、もう一つ大歌にある。其は、歌を作る宮廷詩人と、田舎の即興詩人とが、別々である、と言ふ時代ではない。皆一つの所から、生れて來るものである。長歌の結末が離れて來る。即、五七七七七が獨立して、此方面で發達した歌は、謠ふ形として、非常に、もて囃された時代であつた。此時代になると、ほんとうに、

長歌・旋頭歌を作る人はなくなつた。短歌が、此種々の形を、整理して行つた。一方、短歌から、民謡の形もあらはれた。萬葉集の東歌は、代表的のものであるが、是も、民謡の形をとつてゐる。

奈良朝には、短歌の形が主となつたので、新作の大歌には、是非附かねばならぬものとなつた。此が「反歌」である。

折口は、前提として人麻呂が短歌を固定したと言つて、短歌の發生の原因を解説している。短歌の現れた原因の一つに、大歌があるという。人麻呂の時代は宮廷詩人と田舎の即興詩人とが別々に歌を作つていた時代ではないとして、長歌の結末が離れて来ると、五七五七七の短歌の形態が独立し、これを歌う形が流行していったという。そして、この時代には、長歌・旋頭歌を作る人はいなくなり、短歌がこうした形を整理していったのだという。そして、短歌には民謡の形をとるものも現れたという。こうして奈良朝になると、新作の大歌には短歌が付きものとなり、これが反歌なのだとしている。

さらに折口は、歌における法則の發生に柿本人麻呂が關係しているとする。「敘景詩の發生」では、このことについて言及している。

「敘景詩の發生」(一九二六年六月) 全集一

物盡しの、古代に於て、一つの發達した形になつたものは「讀歌」である。此は、節まはしが少くて、朗讀調に近いからだと言かれて來たのは、謂はれないことである。さうした謠ひ方は、古代から現今まで言ふ所の「かたる」と言ふ用語例に入るのである。「よむ」の古い意義は、數へると言ふ所にある。つまりは、目に見える物一つ一つに、洩らさず歌詞を託けて行く歌を言ふので、後には變化し

て、武家時代の初めからは「言ひ立て」と稱せられてゐる物の元となつたのである。今の萬歳の柱ぼめ・屋敷ぼめの如く、そこにある物一々に關聯して祝言を述べ立てる歌であらうと思ふ。ほぎ歌の一種、建て物に關したものが、後には、替へ歌などが出來て、讀み歌の特徴を失ひ、唯、調子だけの名となつたが、尚「言ひ立て」風の文句を諺うたものと思はれる。

ほぎの詞には、歌になつたものと、やゝ語りに近いものがあつた。前者がほぎ歌であつて、後者は壽詞と稱せられた。壽詞は、祝詞の古い形を言ふので、發想法から、文章の目的とする相手まで、祝詞とは違つて居る。よごとは生命の詞、即「齡詞」の義が元である。壽詞の中、重要なものは、家に關するものである。新室ほかひ或は、在來の建て物に對しても行はれて、建て物と、主人の生命・健康とを聯絡させて、兩方を同時に祝福する口頭の文章である。柱や梁や壁茅・椽・牀・寢處などの動搖・破損のないことを、家のあるじの健康のしるしとする様な發想を採る所から、更に兩方同時に述べる數主竝敘法が發生した。だから、天子崩御前の歌に、建て物の棟から垂れた綱を以て、直に命の長いしるしと見る壽詞の考へ方に慣れて、屋の棟を見ると、綱の垂れて居る如く、天子の生命も「天たらしたり」と祝言する様な變な表現をしてゐる。天智帝の御代のことである。

天の原 ふり放け見れば、大君の御命は長く、天たらしたり (倭媛皇后——萬葉集卷二)

此表現の不足も壽詞に馴れた當時の人には、よく訣つたのであらう。壽詞は、常に譬喩風に家のあるじの健康をほぐが、同時に建て物のほぎ言ともなるのである。かうした不思議な發想法から、象徴式の

表現法も生れ、隠喩も発生した。勿論、直喩法も發達した。併し、概して言へば直喩法は、後飛鳥期にもあつたが、藤原期の柿本人麻呂の力が、主としてはたらいいて、完成した様である。

(中略)

讀む方と知得する事には、相當な發達をしてゐた事と思はれる。手に入れ易い書物の影響は勿論、後世傳はらない文學書の感化さへ見えて居て、それが萬葉集にも現れて居るのである。私は人麻呂が支那の詩の影響を受けて、對句・疊句其他の修辭法を應用したといふ様な考へは、もう舊論として棄てゝもよいと思つて居る。社會の持つ響きを感じて、それから來る漢文學的影響位は出したかも知れぬが、漢學の素養があつて、あの詩形が出來たなど言ふのは、古代からの歌謠の發生の道筋に晦い人である。文學が宗教意識に隨伴して生れる爲、變態心理を寓した形式の上の相似形を、支那特殊の發生と信じて居る様な考へ方は、今では何の權威もなくなつて居る。人麻呂には見られぬ影響も、官吏の日本の詞曲を喜ぶものには、或佛を其作つた歌の上に寓したことは、疑はれないと思ふ。

萬葉集の譬喩には、「天たらしたり」を天智帝の御代のことを祝言するような表現がある。ただ、これは壽詞に馴れた當時の人には、よく分かつたことだつたのだとする。折口は、壽詞が、家の主の健康をほぎ、同時に建物のはぎ言ともなるといい、「かうした不思議な發想法」が隠喩の發生につながつたという。これと併せて、直喩は人麻呂の力が主となつて、完成したようだ、としている。

そして注目すべき点は、折口が、萬葉の文學を語る際、これまでの説を否定し、新たな解釈をしている箇所のあることである。折口は、人麻

呂の對句・疊句などの修辭法を支那の詩の影響を受けて應用したという考え方は捨ててよいという考えを示している。古代からの歌謠の發生に目を向けなければならず、宗教意識などを踏まえなければならぬ、と言つて居る。単に変態心理の形式上の相似形だけをもって、漢學の影響と言ふことはできない、としている。

次いで、人麻呂が起こした形式上の變革、特に短歌の成立は、「長歌と短歌と」短歌の發生(三三)——(一九二八—一九三〇年度)で述べている。ここでは、短歌の形式が意識上の現れてきたのは、藤原の時代であり、それには柿本人麻呂の力が関わつて居るといふ。ただ、全てが確かだと思ふことはできないといふ。それは、人麻呂が空想、すなわち人麻呂の作物とされる歌であつてもそうでない場合があることからである。人麻呂の長歌は、最後の五句が獨立する傾向がある。人麻呂のこうした作風は、記紀や萬葉卷十三の反歌のない長歌よりも形が進んでいると考えられると述べて居る。折口はそれを、反歌のない長歌からくり返し歌い、それは単に文句のくり返しではなく、調子をかえて歌うことであること。その中で、長歌の最後の三句の五七七が片歌として獨立すること。その片歌に對句が入り短歌になることを導き出している。柿本人麻呂の歌から、短歌にいたる過程を論じて居る。またここで、人麻呂は空想の寄り合つてきて居るなど、他の良質な歌が人麻呂のものとされることがあつたことを言つて居る。

人麻呂の表現の小括

純粹な譬喩に傾かせていったのが人麻呂の爲事だつたと言つて居る。また、人麻呂は、自分の感情ではなく、宮廷や貴族の感情を想像して歌を詠むという宮廷詩人が代作をして居た時代からすでに抒情詩を生み出

したと評価している。そして何より、藤原の都の時代に、短歌を意識させたことが人麻呂の大きな功績としている。長歌・旋頭歌が作られない時代になり、短歌がこれを整理していったのだという。短歌の形が主となり、新作の大歌には反歌がつくようになったことを挙げている。ほかに、寿詞が、家の主の健康をほぎ、同時に建物のほぎ言ともなるという、隠喩の発生につながったとして、これと併せて、直喩は人麻呂の力が主となつて完成したようだ、としている。

(三) 作家の評価と比較

折口が万葉の詩人の功績について言及する際は、特に人麻呂が突出した功績を持っているという記述が目立つ。そして、同時代の詩人との比較も行なっている。また、「萬葉集私論」を見てみると、大伴家持による鑑賞にも言及している。

「萬葉集私論」(一九一六年九、一〇、一二月、一九一八年四月) 全集九

人麻呂・赤人らの歌は、大歌所の臺本がまじつてゐることを證據だてゝゐるので、この人々は、一面宮廷詩人即朝廷の御用詩人として、事ある毎に、作歌を仰せつかつたものと見える。公式にも、非公式にも、又私人としての依頼にも應じ、随分代作さへもしてゐたやうである。人麻呂には、殊に著しく此方面に於ける活動が窺はれるやうである。赤人は即興詩人で、人麻呂のやうな大手腕には、缺けてゐるやうである。凡作が多いが、優れたものは高市ノ黒人にも劣らぬやうな、觀照態度の確かなものがある。佐佐木博士は、家持が憶良に傾倒してゐた様な點と、赤人の駄作の多い點から『山柿之門』の山を山上氏だと主唱せられたのであらうが、さのみ鑑賞には長じ

てゐなかつたらしい家持が、單に名聲の隆んな宮廷詩人であつたといふので、無反省に、傳習の儘に書いたものと思はれる。萬葉集の傳へる所では、かういふ意味に於ける御用詩人の、最後に優れてゐたのは笠ノ金村である。

折口は、人麻呂や山部赤人らが宮廷詩人として事あるごとに作歌を依頼されていたと考えている。そして、人麻呂は著しい活動がある一方で、赤人は即興詩人で、凡作が多いとしていながらも、優れたものは高市黒人にも劣らないと評している。一方で、大伴家持に対しては『山柿之門』を例に、家持が山上憶良に傾倒して、赤人に駄作の多いことから、山とは山上氏とするような説もあるが、そもそも家持は鑑賞に長じていなかったもので、無反省に伝習のままに書いたものだと思つて評している。また、御用詩人として最後に優れていたのは、笠ノ金村であると述べている。

人麻呂と、他の作家の比較について特に詳しいものは、「紋景詩の發生」である。

「紋景詩の發生」(一九二六年六月) 全集一

日本人固有の表現法からして、外界を描寫する態度の、そろ／＼發生して來たものが、宴歌殊に旅の新室の宴席の當座詠によつて、愈正式な紋景の姿をとりはじめたところへ、多少、支那の宮廷文學の匂ひが、此にかゝつて來た。其爲、紋景詩は藤原ノ都の時代には、既に意識に上つて來て居た。さうして、抒情詩が、容易にかけあひ、頓才・感情誇張・劇的刺戟を去る事の出來ないで居る間に、人麻呂の大才を以てしても、純戀愛詩・抒情詩の本格を握ることの出來な

かつた間に、既にまづ高市黒人の觀照態度を具備した敍景詩が生れた。さうして、直に續いて、山部赤人が現れて、敍景詩の本式なものを示して居る。

柿本人麻呂も既に、次の時代の暗示者たる才能の上から、意識はしなかつたらうけれども、宴歌又は旅の歌に、敍景の眞髓を把握したものを作つて居た。唯、意識の有無を文學の價值判断に置く時は、人麻呂はまだ渾沌時代にあつて、大きな價值をつける訣には行かない。

敍景詩は藤原の都の時代には意識されていたという。抒情詩は、掛け合いや頓才・感情誇張・劇的刺戟から抜け出せないでいて、人麻呂でさえも純恋愛詩、抒情詩の本格を掴むことができない間に、高市黒人が鑑賞態度を具備した敍景詩を生んだ。続いて山部赤人はそれを本式なものとして示しているという。一方の人麻呂は、宴歌や旅の歌として敍景詩を作っていたが、それを作る意識があつたかどうかは、人麻呂の生きた混沌とした時代背景を踏まえると、文學の價值判断としては置くことはできない、としている。

人麻呂の時代、黒人や赤人によって抒情詩が発展したが、人麻呂はその立場や時代から、文學として価値づけられるものとはなっていないかつたのだとしている。

同著の中で折口は、人麻呂の作物に、繊細な心境が見える点についても言及している。

人麻呂の作物に靜かで細かい心境のみが見えるのは、人麻呂が時流を遙かに抜け出て、奈良末期の家持の短歌に現れた心境に接續して

ゐる處である。其程、其點でも、知らず識らずにも、長い將來に對して、手が届いてゐた事を示してゐる。人麻呂の達した此心境は、客觀態度が完成しかけて來た爲だ、と思ふのが正しいであらう。此靜かな方面を更に展開したのは、高市黒人である。近江の舊都を過ぎる歌にしても、人麻呂のも短歌は優れて居るが、黒人の歌の靜かに自分の心を見てゐるのには及ばない。

漣の滋賀の辛崎、幸くあれど、大宮人の船待ちかねつ（人麻呂

——萬葉集卷一）

漣の滋賀の大曲、澱むとも、昔の人に復も遭はめやも（同）

古の人に我あれや、漣の古き宮處を見れば 悲しも（黒人——萬

葉集卷一）

漣の國つ御神の心荒びて、荒れたる宮處見れば 悲しも（同）

黒人の歌は、傳統を脱した考へ方を對象から抽き出してゐる。後の方は敍事風に見えるが、誰もまだ歌にした事のない時に、靜かな心で、史實に對して、非難も讚美も顯さないで、歌ひこなして居る。没主觀の藝道を會得してゐた様である。一・二句などは、誇張や、實事の興味に踏みこみ易い處を平氣で述べてゐる。主觀を没した様な表現で、而も底に湛へた抒情力が見られる。此が今の「寫生」の本體である。

第一首は、此に比べると調子づいては居るが、此はもつと強い感動だからである。併し、人麻呂の場合の様に、如何にも宴歌の様な、潤滑な調子で、莊重に歌ひ上げる様な事はして居ない。人麻呂のには、悲しみよりは、地物の上に、慰安詞をかけてゐる様な處が見えるのは、滋賀の舊都の精靈の心をなだめると言ふ應用的動機が窺はれる。よい方に屬する歌であるが、調子と心境とそぐはない處が

ある。

黒人は靜かに自身の悲しみや懂れる姿を見て居た人である。抒情詩人としてはうつつつけの素質である。数少い作物の内、紋景詩には、優れた寫生力を見せ、抒情詩にはしめやかな感動を十分に表してゐる。さうした態度の意識は恐らくなかつたらうが、素質にさうした心算に入り易い純良で、沈靜した處があつた爲、創作態度を自覺した時代に入るに、第一要件だつた觀照力が自ら備つて居たのであらう。

人麻呂が作物に対して客觀的態度を完成してきたため、抒情的なもの細かな心境が表現できていることを評価している。そのうえで、人麻呂の短歌が優れているとしながらも、黒人の自分の心を見ている歌には及ばないとして、この時代の抒情的表現の優劣を語っている。

また、赤人や笠金村の態度についても評している。

赤人の歌は人麻呂のに比べると、全體として内容的になつて、形式美をあまり重んじてゐない。人麻呂の様な、形式の張り過ぎた歌は少い。さうして、單純化する力は十分に持つて居た。同じ時代に居てやゝ年長と思はれる笠金村などが、人麻呂を學んで脱することの出来ないで居る間に、赤人は自分の領域を拓いて行つた。彼がまづ拓いたと思はれるのは、趣向のある歌である。自然を矯める傾向は、そこに兆したが、みやびと言ふ宮廷風・都會風の文學態度を創立して、都と鄙との區別を立てる様な傾向の先驅をした。

春の野に葦つみにと、來し我そ、野を懐しみ、一夜寝にける（萬葉集卷八）

あしびきの山櫻花、日並べてかく咲きたらば、いたも戀ひめや（同）
吾が夫子に見せむと思ひし梅の花。それとも見えず。雪の降り、
ば（同）

明日よりは、春菜摘まむと標めし野に、昨日も 今日も 雪はふりつゝ（同）

所謂ますら雄ぶりから遠ざかつたたをやめぶりを發生させたのは、此人である。邑落生活を忘れ、豪族は官吏としての意識を明らかに持つ様になつた奈良の中期には、もう都鄙・官民の別を示すだけの風習が生じた。従來の調子や表現を舊式の歌と考へ、素朴を馬鹿にし、宮廷を中心とする貴族生活の氣分を十分に味はうとする享樂傾向が顯れて來た。赤人は其先驅けであつた。平安朝の文學に於ける優美は、赤人に始まると言うてよい。貫之が赤人を人麻呂に比較する程、値打ちをつけて考へたのは、其流行の祖宗として尊んだのであつた。

赤人は融通のきく才人であつたと思はれる。人麻呂調の抒情味の勝つた歌も作れば、黒人式の沒主觀を體得した様でもある。黒人——赤人との播州海岸の羈旅歌を見ると、殆ど赤人の個性は沒して居て、而も歌としては、値打ちの高い物を作つてゐる。

櫻田へ鶴なき渡る。愛知瀉干にけらし。鶴なき渡る（黒人——萬葉集卷三）

和歌の浦に汐みち來れば、瀉をなみ、蘆邊をさして、鶴鳴きわたる（赤人——萬葉集卷六）

此二つの歌を並べて見ると、赤人が黒人を模してゐた様はよく見える。其上、前の吉野の宮の歌二首の如きは、

足引の 山川の瀬の 鳴るなべに、弓月嶽に 雲立ち渡る（萬

人麻呂の此歌に、既に同様の靜観が現れてゐるから、赤人の模倣した筋路も考へられる。

赤人の歌は、人麻呂と比べ、形式美を重んじておらず、形式張つてもいないとして、單純化して表現されているという。そして赤人はますます雄ぶりとは対になるたをやめぶりを發生させたと評している。この時代、笠金村が人麻呂を学んでゐるうちに、赤人は自分の領域を築いていつたと評している。折口は、赤人の歌から、奈良の中期には、もう都と鄙、官と民の區別をした風習が生じていたという事實を指摘している。そのうえで、赤人が、この時代の素朴を蔑み、宮廷を中心とした貴族生活の中の享樂を歌の表現とした先駆けであつたとしている。また、紀貫之が赤人を評価しているのは、単に貫之の流派の祖宗として尊んだからに過ぎないとしている。赤人が黒人の主觀を消し去る態度も体得していたと評している。それは、黒人と赤人の羈旅歌を比較して評価している。

あわせて折口は、大伴家持の歌は人麻呂の影響を受けていると指摘している。家持は抒情から叙景へと詠む歌を代えて、この点が人麻呂と似ていることを指摘している。そのうえで、家持の歌は感興が鋭く、近代적であるとして、赤人の末期のみやび歌の作物よりも評価している。

家持は、どつちかと言へば、人麻呂から得た影響の部分が、よい様である。そして素質的に、抒情派から出て、敘景に入つた人である。此點に、最、人麻呂と似て居る點が見出される。而も歌は、感興の鋭い、近代的な神經を備へたものである。赤人の末期の「みやび歌」よりは、私は此方を高く評價したいのである。

折口は、この後も、主に高市黒人、山部赤人、大伴家持、笠金村を中心に、柿本人麻呂が与えたと考えられる影響、そして歌自体の鑑賞と評價を行っている。これは後世まで続き、折口が万葉集やその時代の作物を考える際に、柿本人麻呂の作物の表現や姿勢が大きく影響した、という考へを持つてゐることが指摘できる。

先述の通り、赤人などが人麻呂よりも劣ると言つた、一九一六年、一九一八年の「萬葉集私論」などもあるが、ここまでは、おおよそ万葉の歌人に対してその功績を評する書きぶりである。

一九二六年より後も、こうした論調を繰り返すわけだが、その論究の内容は、この一九二六年の著作の中で、大方提示できてゐるといえる。

こうした万葉の時代の人物の評価をまとめたと言へるのが、「短歌の本質と文學性との問題」(一九四五年三月)である。

ここでは、人麻呂が短歌の土台を固めたことを評価しながらも、人麻呂の作物に本質そのものがあるわけではないと述べ、歌の本質論を展開している。まず、その本質は、時代の中で決まていくという結論を出している。人麻呂の歌には、概念的な歌と、写生主義的な觀照性の歌の二種類があり、この両方を受け入れていかなないといけないとしている。これは、今の歌が、人麻呂の価値を準拠として發足しているからだとして、人麻呂の作物に評価を与えてゐる。その上で、赤人や家持が人麻呂に次いで出て来て、黒人は人麻呂と象徴的な地位に立つてゐるとしながらも、人麻呂も黒人や家持的なものが認められるという。家持のものなどは、人麻呂からよっぽど変わつてきている。新古今集やそれ以後のものを念頭にしている人等は、家持の作品を本質的とすべきだが、実際にはそうはなつていない。これは家持を粗漏に見ていたからで、結局は人

を見て論じていたためで、その作品、作風の観察から正しく見ているわけではなかったのだ。以前に成立した本質的なものとなると、理想を發見することはできても、理想を容れる余地はないのだ。そのため、家持の歌だから価値が低いとか本質的なものを持つていないという考えはしてはいけない。個々の作品の価値は、人麻呂より劣っていたとして、後代の歌の傾向が、家持に含まれるとすれば、家持の作品がそれぞれの時代の文壇において歌の本質を固めようとする道程にあったものだということは疑いのないことなのだと云っている。例え個別の歌で劣つていようと、後世の作物の完成にいたる道筋を示しているものが、その作物が作られる時点でのいわば本質ということになる。そうした点で、家持の功績を評価している。

作家の評価と比較の小括

ここまでの折口による詩人への評価は、その技巧や歌人の着目点をもとに批評をしていた。特に一九二六年の時点では、赤人のものに凡作が多いことや、家持が鑑賞する能力に劣つていたことを述べているが、一九四五年の段階では、今現在という視点から、影響を与えてくれた歌人の功績を評価しようとしている。時系列で見ると、折口が、はじめ万葉の詩人について、その作品等から評価していたのが、後に現在の歌に与えた影響という点で評価しようという目線で語るといふ、論調の変化が確認できる。

三、折口の柿本人麻呂を通じた他界や呪言の見方

柿本人麻呂と併せて、他界について論じた初出は一九二〇年五月の「妣が國へ・常世へ」である。ここでは、淨見原天皇・崗宮天皇（日竝知皇

子尊）が、神あがりをするという考えがあったことを述べている。

「妣が國へ・常世へ」（一九二〇年五月）全集二

ほんとうに、祖々を怖ぢさせた常夜は、比良坂の下に底知れぬよみの國であり、ねのかたす國であつた。いざなぎの命の据ゑられた千引きの岩も、底の國への道の中絶えにすることが出来なかつた。いざなぎの命の鎮りますひのわかみや（日少宮）は、實在の近江の地から、逆に天上の地を捏ぢあげたので、書紀頃の幼稚な神學者の合理解の手が見える様である。尤、飛鳥・藤原の知識で、皇室に限つて天上遷住せしめ給ふことを考へ出した様である。神あがりと言ふ語は、地の岩戸を開いて高天原に戻るのが、その本義らしい。淨見原天皇・崗宮天皇（日竝知皇子尊）共に、此意味の神あがりをして居させられる。柿ノ本ノ人麻呂あたりの宮廷歌人だけの空想でなく、其頃ではもう、貴賤の來世を、さう考へなくては、満足出來ぬ程に、進んで居たのであらう。ひのわかみやが、天上へ一宮移しのあつたのも、同じく其頃の事と思ふ外はない。

來世観について述べ、これが人麻呂のような宮廷歌人だけの空想ではなく、すでに周知の事実という感覚で、貴賤の來世観ができあがつたことを述べている。ただ、この文章からは、人麻呂のような宮廷歌人が來世観を作り上げることに影響を与えていたことも読み取れる。

來世観について、より具体的に書かれているのは、一九二二年一月の「萬葉びとの生活」である。

「萬葉びとの生活」(一九二二年一月『白鳥』第一号) 全集一

我々の最初の母いざなみの行つたよみの國は、死者の爲の唯一つの来世であつた。而も其いざなみすら、いつか、大空のひのわかみに遷されて居る。此は、萬葉人の生活が始まる頃には、もう兆して居た考へである。人麻呂は、倭成す人の死後に、高天、原の生活の續く事を考へて居る。而も其子孫に言ひ及して居ない處から見れば、一般の萬葉人の爲には、やはり常闇の「妣の國」が、横たはつて居るばかりだつたものであらう。理想の境涯、偶像となつた生活は、人よりも神に、神に近い「顯つ神」と言ふ譬喩表現が、次第に、事實其ものとして感ぜられて来る。唯、萬葉人の世の末迄、あきつかみを言ふ時に、古格としては、とのてにをはを落とさなかつたのは、意義の末、分化しきらなかつた事を示して居るのである。

よみの國が唯一の来世だつたのが、大空のひのわかみの話に移つてくるのが、萬葉人の生活の中にはもう現れていたという。そして、人麻呂が倭成す人の死後は、高天、原の生活が続くことを考えていたことが指摘されている。それは、人よりも神に、神に近い「顯つ神」という譬喩表現のあることから考へている。折口は、萬葉人の表現から、当時の他界観を探ろうとしている。

一九二二年の「萬葉集の成り立ち」では、柿本人麻呂が皇子を悼んだ歌を理解しようとしている。

「萬葉集のなり立ち」(一九二二年二月) 全集一

柿本人麻呂の日竝知ノ皇子ノ尊や、高市ノ皇子ノ尊を悼んだ歌の如きも、實は個性表現でなく、官人の群衆の爲の代作である。其と同じ

意味で、人麻呂の泊瀬部皇女・忍壁皇子に獻じた歌(卷二)は、悲歎を慰める爲に作つたのではない。河島皇子の葬儀の爲に、右の皇女・皇子に囑せられて作つた物と見るべきで、明日香皇女を木ノ上ノ宮にすゑてあつた時に、同人の作つた歌(卷二)と同じ意味で作られたのである。此から見れば、日竝知ノ皇子ノ尊の舍人等の作と傳へて居る廿三首の短歌も、やはり、人麻呂の代作と言つてよい。又、藤原宮の役民の歌・藤原宮御井の歌(卷一)などは、作者知らずになつて居るが、やはり、人麻呂に違ひはあるまい。

かうして見れば、人麻呂が日竝知・高市二太子に事へて居たなど、言ふ説は、單なる想像に過ぎなかつた事になるのである。人麻呂以前にも、我々の推測の及ばない幾多の宮廷詩人が居て、新作の大歌を作つたものと信ぜられる。人麻呂の作にも作者知らずとして傳つて居る物が多い筈である。宮廷詩人の作の、無名、又、囑託者の名で傳つた時代と、作者の名の明らかになつて來た時代とがある。此二つの時代を跨げたのが人麻呂である。

當時は死者を悼む歌は、作家の個性表現をなくし、群衆のために作られた歌だつたという。柿本人麻呂が皇子を悼んだ歌は、この群衆のための代作だつたとする。河島皇子の葬儀のための作物は、泊瀬部皇女・忍壁皇子の悲歎を慰めるために作つたのではなく、囑された物と見るべきであるとする。こうした点から、日竝知ノ皇子ノ尊の死去の際に舍人等の作と伝えている二十三首の短歌も、人麻呂の代作としている。また、藤原宮の役民の歌・藤原宮御井の歌(卷一)も作者知らずになつて居るが、人麻呂の作としている。

この意味をより詳細にしていくのが、一九二四年の「國文學の發生(第

二稿)である。ここでは、柿本人麻呂の後半生の時代頃、民衆に創作意識のまだなかつた頃に「乞食者詠」ができたと言っている。

「國文學の發生(第二稿)」(一九二四年六・八・十月) 全集一

五 ほかひの淪落

「乞食者詠」の出來たのは、どう新しく見ても、民衆に創作意識のまだ生じて居なかつた時代である。創作詩の始めて現れたのは、人を以て代表させれば、柿本人麻呂の後半生の時代である。蟹や鹿の抒情詩らしく見える呪言敘事詩の變態の出來たのは、前半期と時を同じくして居るか、少し古いかと思はれる頃である。形は壽詞じたてで、中身は敘事詩の抒情部分風の發想を採つて居る。此は壽詞申しと語部との融合しかけた事を見せて居るのである。さうして其ほかひたちが、どういふ訣で流離生活を始める事になつたか。

敘事詩を傳承する部曲として、語部はあつたのだが、壽詞を申す職業團體が認められて居たか、どうかは疑問である。ほかひなるかきへの獨立した痕は見えないばかりか、反證さへある。祝詞になつては勿論だが、壽詞さへ、上級神人に口誦せられて居た例は幾らもあるし、氏々の神主―國造Ⅱ村の君―と言つた意味から出た事であるが、氏ノ上なる豪族の主人であつた大官が、奏上する様な例もある。さすれば、此が職業としての専門化、家職意識を持つた神事とはなつて居なかつたとも言へる様である。而も一方、平安朝には既に祝師(のりとし)などと言ふ、わりあひに下の階級の神人が見え出して來た。其に元々、呪言を唱へることが、村の君の專業ではなく、寧、傳來ある村の大切な行事の外は、壽詞に關係せなくなる。さうなると、此爲事に與る神人の資格は、段々下の方に向いて行くであ

らう。其上、當時まだ、村の君など言ふ頭分を考へなかつた時代の記憶を止めて居た地方では、成年式を経た若者たちが「一時神主」^{イツトキ}として、神にも扮し、呪言をも唱へた。其が沖繩ばかりか、大正の今日の内地にすら残つて居るのである。さう言ふ風に若者中、神主・神主と、色々に呪言を誦する人々がある上に、突如として宗教的自覺を發する徒などがあつて、呪言を取扱ふ人々は、必、多様であつたに違ひない。

流離生活をしていたほかひたちが、壽詞仕立ての、敘事詩の抒情部分風の發想をしていたと言つて居る。そして、平安朝には祝師などという下級の神人が出てきているし、呪言を唱へることは村の君の專業ではなくなるから、こうしたことをする神人はだんだんと下級の者になつてくる。ここから、成年式を経た若者たちが「一時神主」として神に扮し呪言を唱へたと、まればとの考えまで發展させて述べているのである。「古代生活の研究」では、人麻呂の「藤原ノ宮の役ノ民の歌」から、常世の國が現實のものと同様考へられていた事實について論じている。

「古代生活の研究」(一九二五年四月) 全集一

常世の國は、記録の上の普通の用語例は、光明的な富みと齡との國であつた。奈良朝以前から既に信仰内容を失うて、段々實在の國の事として、我國の内に、此を推定して誇る風が出來て來た様である。常陸風土記に、自ら其國を常世の國だとしたのは、其一例である。人麻呂の作と推測される「藤原ノ宮の役ノ民の歌」^{ユヅメノミタノウタ}を見ても「我が國は常世にならむ」と言うてゐるのは、藤原の都の頃既に、常世を現實の國と考へてゐたからである。此等から見ると、海外に常世の

國を求める考へ方は古代の思想から當然来る自然なものである。出石びとの祖先の一人たるたぢまもりが「時じくの香の木實」を採りに行つたと傳へる常世の國は、大體南方支那に故土を持つた人々の記憶の復活したものと見る事が出来る。此史實と思はれてゐる事柄にも、若干民譚の匂ひがある。垂仁天皇の命で出向いた處、還つて見れば、待ち歡ばれるはずの天子崩御の後であつたと言ふ。理に於て不都合な點は見えぬが、常世の國なる他界と、我々の住む國との間に、時間の基準が違つてゐると言ふ民譚の、世界的類型を含んでゐる事を示してゐる。浦島子の行つたのも、やはり常世の國であつた。此物語では「家ゆ出で、三年のほどに、垣も無く家失せめやも(萬葉集卷九)」と自失したまでに、彼土と此國との時間の物さしが違つてゐた。浦島の話は、更に一つ前の飛鳥の都の頃に、既に纏つて居たものらしいが、早くもわたつみの宮ととよの國とを一つにしてゐる。海底と海のあなたとに相違を考へなくなつた事は、前にも述べた通りである。

常世の國を理想化するに到つたのは、藤原の都頃からの事である。道教信者の察想した仙山は、不死常成の樂土であつた。其上、歸化人の支那から持ち越した通俗道教では、仙境を戀愛の理想國とするものが多かつた。我國のとこよにも戀愛の結びついて居るのは、浦島の外に、ほをりの命の神話がある。此は疑ひなく海中にある國として居る。唯浦島と變つて居る點は、時間觀念が彼此兩土に相違のない事である。此海中の地はわたつみの國と謂はれてゐる。此神話にも、富みと戀との常世の要素が十分にはひつて來てゐる。富みの豊かな側では、古代人の憧れがほのめいてゐる。海驢の皮疊を重ね敷いた宮殿に居て、歡樂の限りを味ひながら、大き吐息一つしたと

言ふのは、萬葉歌人に言はせれば、浦島同様「鈍や。此君」と羨み嗤ひをするであらう。ほをりの命の還りしなに、わたつみの神の釣り鉤を手渡すとて訓へた呪言は「此鉤や、呆鉤・噪鉤・貧鉤・迂鉤」と言ふのであつた。此鉤を受けとつた者は、これ／＼の不幸を釣り上げると咒ふのである。其上に水を自在に満干させる如意珠を贈つて居るのは、農村としての經驗から出てゐるので、富みの第一の要件を握る事になるのである。貧窮を與へる事の出来る神の居る土地は、とりも直さず、富みについても、如意の國土であつた訣である。

とこよと言ふ語が常に好ましい内容を持つてゐるに拘らず、唯一つ違つた例は皇極天皇紀にある。秦ノ河勝が世人から謳はれた「神とも神と聞え來る常世の神」を懲罰した、其事件の本體なる常世神は、長さ四寸程の綠色で、黒い斑點のあつた蟲だつたとある。橘の樹や蔓椒に寄生したものを取つて祀つたのである。「新しき富み入り來れり」と呼んで、家々に此常世神を取つて清座に置き、歌ひ舞うたと言ふ。巫覡の託言に「常世神を祭らば、貧人は富みを致し、老人は少きに還らむ」とあつた。かうした邪信と見るべきものだが、根本の考へは、やはり變つて居ない。常世並びに常世から來る神の内容を明らかに見せてゐる。

人麻呂の作と推測される「藤原ノ宮の役ノ民の歌」の中で、「我が國は常世にならむ」と言つてゐることから、藤原の都の頃は、常世が現実にある國と考へていたという。この常世觀の形成には民譚の影響もあると言ひ、たぢまもりが常世から時じくの香の木実を持つて帰つてくると、常世とは時間の基準が違つていたということや、萬葉集卷九の一節から

も見られるような、浦島子の常世の国訪問という民譚を例に、その影響を指摘している。また、わたつみの国の神話には、富と恋の常世の要素が十分に備わっていると言ひ、わたつみの神が釣り針を手渡す時に詠んだ呪言には、不幸を釣り上げると呪っているのだという。

なお、折口は一九二六年一月に早川孝太郎とともに、三州北設楽郡豊根村牧ノ島三澤の花祭や、信州下伊那郡且開村の雪祭を見学している。この頃、まれびとや精霊についての考えを深めている。この間に折口の確認したことは、「山のことづれ」(一九二七年一月)によくまとめられている。まれびとが海からやってくるものだったが、次第に野や山にからやってくるように意識の変化が認められること。神が精霊の悪さから人々を守るために呪言を唱え村の土地や家々の屋敷を踏み鎮めるといふことが語られる。また、萬歳や座頭などが山や野で暮らす人たちに語った貴人の話から、人々が自分たちの先祖をこうした貴人であったことを信じるようになること。神が話す言葉信じることになること。さらに、藁装束を身に着けた山人や山姥が山から下りてきて、イチ(市)で山づとを配ることなどから、山づとが縁起物に発展していくことを述べている。万葉集からこうした考えを導いていることも分かる。万葉集卷十八「四一三六の同伴家持の歌「あしひきの山の木梢のほよ取りてかざしつらくは千年寿くとそ」から、寄生木の頭飾や山の立ち木の皮を剥いで削り掛けた造り花などが山づとであると言ひ、めでたいという感覚があったことを説明している。このことは、「鸞替へ神事と山姥」(一九二八年一月二十五日)で、山の神が杖をついて村の祝福に來ること。その杖が木の削り掛けなどになると言つて、論を強化している。さらに折口のこの時期の著作を見ると、「鬼の話」(一九二六年)で、常世神は内地では、山や空から來るといふ觀念に変わっていること。「國文學の發生」(第

三稿)(一九二七年十月稿)で、まれびとの原の姿は神であり、第一義に古代の村々に、海のあなたから來て、村人たちの生活を幸福にして還る靈物を意味していたこと。まれびとは皆、蓑笠姿を原則としたこと。この服装を略すようになり神としての資格が忘れられ、地方では妖怪として、また地方では祝言を唱える人間としか考えなくなつたこと。そして神人として最下級と考えられ、乞食者の階級が生じたことを言つている。まれびとは祝言を述べてほかひをすると共に、土地の精霊に誓言を迫り、力足を踏み、地靈を抑壓しようとする。こうしたことが平安朝には陰陽道の台頭と共に興つた、ということをやつて言っている。

こうした興味と理解が、この頃の折口の、柿本人麻呂を通して、民俗を理解する思考にも影響していく。「萬葉集講義―飛鳥・藤原時代―」では、くにぶりとたまふりの歌に注目している。

「萬葉集講義―飛鳥・藤原時代―」(一九三二年二月)全集九

くにぶり或はたまふりの歌には、條件的に舞踊がついて居る。聲樂と舞踊とは密接な關係を持つて居るものであつて、東のくにぶりの舞踊は、殊に異國的な感じのするものだつた。其ゆゑに、東遊びは、宮廷から諸大社に寄與せられて、其演奏を許された爲、保存の道が出来、更に此に多少の雅樂的手法が加へられたので、藝術的にもなつて行つたのである。其は、あそびの場合だが、うたとしての東のくにぶりの最後に行きつくしたものは、風俗歌である。風俗はくにぶりの譯語であつて、風俗と言へば、其は即東風俗のことであつた。平安朝藝術の整うた時代には、舞踊を伴うた聲樂と、聲樂を専らにするものが岐れて來てゐる。東のくにぶりの誘導した大きな藝術であつた、東遊びと風俗歌とは、平安朝になつて、東遊びの方は詞

章を客體とし、鎮魂の舞踊が中心になつて居た。風俗では、聲樂的方面を主體とすること、催馬樂の如くなつた。

萬葉集時代には、ふりは一種特別の條件を具へてゐる。今迄のうた・ふり總てが、歌と稱せられて來た。長いもの短いもの、或は我々から見て形の整うたもの、整はぬもの全部をひつくるめて、此を歌と言つた。其中、次第に短歌が歌の中心になつて來た。世間にもはやされて來たからである。此は、短歌に優れた作者が多かつたからではない。文學上の價值といふものは別にして、歌の盛んであつたのは奈良朝である。其れには、長歌及び短歌以前のものもあるが、其等は最早、意味がなくなつて、長歌も奈良朝では擬古風に過ぎなく、どの程度まで生命があつたものか訣らないのである。短歌といふものが、日本の謠ひ物の中心になつて來た、と思はれる境目を作つた柿本人麻呂の作を見ても、長歌に優れて居たと考へられると同時に、其が擬古文であつて、生きた抒情詩とは思はれないのである。萬葉集の長歌といふものが、どの邊まで、眞の生の欲求から出たものであるか疑はれるのである。歌と言へば、短歌を考へてゐたと言つて差し支へないと思ふ。さうして、短歌と言へば、殆たまふりの歌である。つまり、古代の人が、たまふりの文句を縮少した形をもて囃し、常に用ゐて居たのが、社會的に色々の用途を開き、文學化して、短歌が盛んになつて來たのである。短歌は洩れなく、ふりと稱すべきものと思ふ。萬葉より後になると、其傾向が愈はつきりして來る。所謂、うた・ふりを籠めて歌と言つて置く。

平安朝には舞踊を伴つた声樂と、声樂を専らにするものとが分かれてきた。萬葉集の時代には、ふりは、歌を稱していた。その中で、短歌が

歌の中心になつてきた。柿本人麻呂の歌の中には、叙情的と思われぬものもある。ここで、歌と言へば短歌を考へていたと考へられ、古代の人がたまふりの文句を縮少していった中で短歌が盛んになつてくる。ここから、短歌はふりと稱すべきものであると考へている。短歌がたまふりを元にするとともに、ほとんどがたまふりの歌であると思へているのだ。

なお、人麻呂が取つた歌詠みの姿勢についても論じられている。

創作詩

思ふに、此時代を中心として、文學を作る態度が段々變つて來た事が考へられる。さうして次第に、代作が、代作と言ふ意識を露骨に含んで來た。祝詞の方では、代作が公式に行はれて居たが、一方歌の方でも、祝詞が使はれる時と同じ場合に、歌の使はれる場合が出来て來た。歌と祝詞と、用ゐられる場合が接近して來たのだ。つまり、公の儀式に、祝詞の代りに歌を唱へる様になつた。正式には祝詞、歌は其くだけたもので、祝詞の後に諷誦したものらしい。萬葉集の中、原則的なもの——天子の御病氣、皇族のなくなつた場合、或はおめでたい場合に作られた歌——は、殆皆代作であると言へよう。古い時代の作物には訣らぬものが多いが、其が明らかに訣るものは、柿本人麻呂である。人麻呂などになると、代作として、なれば理會の出來ぬ歌がある。人麻呂は他の人の代作をして居る外に、人麻呂時代の歌で、作者未詳となつて居る歌の中には、人麻呂の作つたものが可なりあると思ふ。だが、其と共に、名高いが爲に、人麻呂の作と推定せられた他人の作も多い様である。殊に人麻呂には、人の爲に作つて居りながら、自分の感情を出して居る歌がある。

柿本朝臣人麻呂獻二泊瀨部皇女、忍阪部皇子一歌一首并短歌（卷

二）

明日香皇女木^{*}、^へ瀨、殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌（同）

此二首の中、殊に前の歌は、故人が男性か女性か判然せぬ様な言ひ方で、見方によれば、人麻呂自身の愛人を哀しむと言つた風にもとれる表現を持つて居る。而も此詞書その物が、既に不審で、或は泊瀨部皇女に寄せた同母兄忍阪部皇子の爲の代作で、河島皇子を悼んだといふ事を示してゐる様にも見える。代作詩人としては、人麻呂にも、更に先輩のあることが考へられるが、萬葉では其が訣らぬ。代作詩人の系統では、人麻呂を第一に据ゑて、先考へて居る。

人麻呂は、技巧上祝詞の影響を受けたと言はれて居るが、其は、昔の文學の類型を辿りながら、少しづつ變へて來て居るのである。挽歌は、死んだ人の爲には、類型を追はなければ訣らないのである。文句或は謡ひ方が似て居らねばならなかつたのだ。同じ調子で歌詞が違ふ、つまり調子だけが類型を追うて行く。替へ歌は、かうして出来る。少しでも類型を辿らう／＼として謡ふ爲に、人麻呂は、咒詞系統の修辭を用ゐて居る。又、對句・疊句を用ゐて居る點を言ふのではなく、内容の上で、漢文學の素地を十分持つて居ることも、指摘出来る。萬葉で言へば、卷九は大體古くから新しきに互つて、漢學の影響をうけたらしく思はれる人の歌を集めて居る。

人麻呂の歌には、人のために作りながらも、自分の感情を出している歌があるという。ここで、人麻呂が愛人を哀しむようにとれる表現の歌と河島皇子を悼んだことを示している歌があることを例に出している。人麻呂は技巧上祝詞の影響を受けたと言われていても、それは死んだ人

のために歌う挽歌のために、昔の文學の類型を追わなければ分からなかつたことと、それが変化していることを言っている。そして、人麻呂は類型をたどろうと試みつつ歌っているために、呪詞系統の修辭を使っていることを指摘している。こうしたことは、「萬葉集の研究」（一九三四年五月）などで、今後繰り返して述べていくことになる。

また、これらとは別に、「柿本人麻呂」（一九三三年二月）では、小野神への信仰と柿本族人の巡遊について述べている。柿本朝臣に付屬する柿本部があつたならば、柿本氏族の小野神を主神として、信仰を持ち回る旅を続けていたという。村に落ち着けば、分割した物がさらに漂泊して廻り、移動していったと述べている。こうした漂泊には、呪術を行ない、呪詞を誦して回つたと言ひ、小野神にこうした痕跡が著しく見られることから、柿本族人の巡遊形態もここから考へてよいと述べている。柿本氏はその資格を表しているとしている。人麻呂はその柿本氏の代表といえる大作詞人であつたため、いつからか人麻呂が称号となつた。そのため、人麻呂以後の時代、古くから漂泊の唱文として布教されていた様式の歌が、人麻呂の作物として加わつてきたのだという。また、人麻呂作と言われるものは、実作物としての成書、柿本人麻呂作として信じられたもの、柿本作と言ふ伝説や判断をもつて歌集に集めたものの三通りになる、と言っている。

折口が自身の歌に対する考えを示したのは、「柿本人麻呂論——人麻呂歌集の側から見て——」である。

「柿本人麻呂論——人麻呂歌集の側から見て——」（一九三三年十月）全集九

戀愛心理を描寫したもの、と言ふよりも寧ろ、^{ケサウビト}懸想人の行動——とも言ふべき外的傳習行爲——を寫したものにおいて、其がよく現れて

居る。私は、日本の短歌の上に、戀愛心理描寫の最初の人として小町を擧げて居たが、其は既にある程度まで完全に、萬葉集に見える人麻呂集の人麻呂に出てゐたのである。謂はゞ小町の歌なるものは、人麻呂の延長に過ぎなかつたことを、改めて見出した訣である。元々、かうした歌口の發生した原因は、わりあひ明らかに指摘することが出来る様である。咒術の爲の短歌である。咒文である。私は「戀」を以て、「靈ごひ」の方式から出て、代を經るに隨うて、抽象化して行つたものと信じてゐる。「靈ごひ」の儀禮に用ゐた咒文が、戀歌の内容を作つて行つたと考へるのである。此處には、此方面の説明をくり返してゐることの出來ぬのが残念だ。ともかく唱和問答の爲の言語形式であつた短歌が、とりわけ相聞・戀愛の歌に純化して行く過程において、咒術的な内容を含んでゐたことは、明らかである。私どもが前から解決つかずに居たことは、平安朝の歌にある、いとせめて 戀しき時は、うばたまの 夜のころもを、かへしてぞ寝る (古今集、小町)

思ひあまり 出でにしたまのあるならむ。夜深く見えば、魂結びかうした例が、何處から出て來たかと言ふことであつた。在來の鑑賞を以てすれば、此をも、やる瀨ない戀愛に住む者の熱情から出たもの、と見る風の癖があつたのである。だが、今日は寧、かうした平敘式なものが、何處に抒情味を湛へて居るか、を疑はせるに過ぎないのである。私は、これを咒歌と見て居る。尠くとも、短歌の中には、咒歌から、唱和相聞の歌或は、文學としての歌の領域に轉じて來たものがあると思ふのである。さうして、其傾向のものを追うて見れば、やはり平安朝のものゝ方が、文學味が深まつて來てゐ

る。謂はゞ、まるみとしなやかさとが加つて居ると言へる訣だ。此意味において、小町と、其から一部分の作品から見た業平などは、人麻呂集の歌風の繼承者である。言ひ換へれば、人麻呂の作物と傳へられたものが、平安以前から、特別な姿を以て世間の戀歌に影響を落し、其れを次第に文學らしい形に整へて行つたことが知れる訣である。

さう言へば、人麻呂集自身、既に咒歌から一轉化した多くのものを、含んでゐたらしいのである。

尤、此は人麻呂に限つたことではなく、他人の多くの作物の中からも、多くの例を引くことは出来るのだが、とりわけ、人麻呂の名で傳へてゐるものには、此痕を顯はに見ることが出来る。

折口は「恋」を「靈ごひ」の方式から出たものと見て、代の推移の中で抽象化していったと考へている。そしてこの「靈ごひ」の儀禮に使つた呪文が、恋歌の内容を作つたと考へている。折口は、古今集で小町が読んだ歌や、伊勢物語の恋歌や魂結びする短歌をもつて呪歌と見て、短歌の中には、呪歌から唱和相聞の歌や文學としての歌の領域に入つていくものがあつたと考へている。かうしたことから、小野小町や在原業平は人麻呂集の歌風の繼承者であるとしている。

柿本人麻呂を通して、他界や呪歌、そして神の考え方をまとめるのは、「唱導文學」である。折口は、神遊の詞章が短縮していったことと、短歌の發生を結びつけようと試論している。

「唱導文學」(一九三四年八月) 全集七

「山の傳承」が、山人、山部及びその類の神人の間にあつたのが、

早く詞章を短縮した歌殊に短歌の方に趣いたのは、神遊カムアソビ詞章の特殊化であつた。私などは、海部が其豊富な海の幸と、廣い生活地を占めてゐる爲の發展力を、何處までも伸して、神遊びまでも、平安朝に到つて自家のものを推し出して來たが、元は、「山神樂」が重要なものだつたと思ふ。「採物」を見ても、殆、山及び山人、山の水に關係ある物ではないか。

あまりに物を對比的に見ることは、誤つたし、うちに違ひないが、私は後世式にかう言はう。海部の淨瑠璃、山部の小唄。即前者は、平安期の末まで、長い敘事詩を持ち歩き、後者は早く奈良朝又は其前にすら短歌を盛んに携行したものと見られるのである。たとへば、山部宿禰赤人、高市連黒人、皆山部に關係深い人々である。柿本朝臣人麻呂にしてからが、倭の和邇氏の分派であり、其本質、其同族を參考にしても、山に關係が深いのである。かう言ふ見方は、必しも正確を保する事は出來ない。が、一應は考へに置いて見る必要がある。

先述の通り、折口は一九二六年の花祭や雪祭見學を通し、その後のまればと研究を發展させている。こうしたことから、山の神や精靈について充實した論考を展開している。

その成果を、短歌の發展を論じるにあたり、活用しているのだ。ここで、前提として「山神樂」が重要なものと仮定し、「採物」を見ても、ほとんどが山や山人、山の水に關係があると云つてゐる。また、海部の淨瑠璃は平安期の末まで敘事詩を持ち歩き、山部の小唄は奈良朝かその前に短歌を携行していたと見られると云つてゐる。山部宿禰赤人、高市連黒人などは山部に關係してゐて、柿本人麻呂は和邇氏の分派であり、やは

り山に關係してゐるとしてゐる。こうした部分から、山人や山部のほか、そうした類の神人の間にあつた詞章を短縮した短歌にしていったと考えられている。そしてこれを、神遊詞章の特殊化といつてゐる。

なお、時期は不明だが、託宣との關係について「歌謠を中心とした王朝の文學」で述べてゐる。

「歌謠を中心とした王朝の文學」(年月日未詳) 全集一一

新古今集に自然描寫の態度が出來たのは、一つは客觀態度の發生により、一つは、歌合せの場で詩歌合せを行つた事による。詩には、感銘が明らかに出來るので、其影響によつて、歌の印象も明らかになつたのである。此半面のぼやけた方面は、抒情方面には大きな問題を提出したが、結局は失敗で、新古今集の成功は、敘景方面にあつた。

千載集には、神のお告げの歌が出來てゐる。衣通姫・人麻呂・住吉明神を和歌三神といふやうになつたのは、歌の傳統争ひからのものであるが、起りは熊野にある。平安朝時代には熊野の信仰が盛んだつたが、熊野では歌によつて託宣を下し、其風が全國の社寺に擴つたのである。託宣の歌は皆、ぼやけてゐる。譬へば、清水觀音の御歌だと言ひ傳へられた、

なほたのため。しめぢが原のさしもぐさ。われ世の中にあらむ限り
は (新古今集卷二十)

何だか詠らぬ歌だが、詠らぬ聯想が、此歌のありがたい處で、咒文風になつて來てゐるのである。

ちはやぶる 卯月八日は吉日よ。神さげ蟲のはらへをぞする
の種類の農村で今日も記憶せられてゐる歌は、いづれ巫女の夢に

由つて出来たものであらう。かうしたお告げの歌が、次第に數が増して来る。この幻のやうな處に象徴的な暗示があるので、此を新古今集では、尊ぶやうな傾向があつた。定家の、

年も經ぬ。祈る契りは 初瀬山。尾の上の鐘のよそのたぐれ (新古今集卷十二)

「初瀬山尾の上の鐘の」の處がだましである。此様に意味の完了せぬことが、新古今の一特徴で、西行法師の嶋立つ澤の歌と同様の病ひである。當時の人には、此で悟りの境地に這入つたものと思はれてゐたのであらう。或は、此が、歌の沈滞する様になる第一歩であつたのかも知れぬ。描寫の全能力を發揮せず、幻想を當て込んでゐる處が誤りであつた。

平安朝時代の熊野に歌によつて託宣を下した事。そして、その風習が全国の社寺に広まつたことを言つてゐる。千載和歌集にも神のお告げの歌が出てゐることを例に挙げてゐる。歌の伝統争いもあるが、こうしただことが起りとなつて、衣通姫、人麻呂、住吉明神を和歌三神と云うようになつたことが述べられてゐる。託宣の歌は皆ぼやけていて、意味が分からない点をむしろありがたい点として呪文風の歌や、農村で卯月八日を詠つた巫女の夢想によつてできたお告げの歌などをその例として挙げてゐる。こうした歌は次第に増えてきて、新古今集ではこれを尊ぶやうな傾向を帯び、定家の意味の完了しない歌にも見られると言つてゐる。託宣としての歌が、後の作物にも影響してゐることを述べてゐるのだ。

柿本人麻呂を通じた他界や呪言の見方の小括

一九二〇年の「妣が國へ・常世へ」の中で、人麻呂の時代には、来世観が宮廷歌人の影響も認めつつ、それだけの空想ではなく、すでに周知の事実という感覚でできあがつてゐたことが指摘されてゐた。一九二二年の「萬葉人の生活」では、よみの國が唯一の来世だつたのが、大空のひのわかみこの話に移つてゐることが、万葉人の生活の中にはもう現れてゐたと、考えを發展させてゐる。その考えは、人麻呂が倭成す人の死後は、高天原の生活が続くことを考へてゐたこと。人よりも神に近い「顯つ神」という譬喩表現のあることから考へてゐる。

また、万葉の時代、當時は死者を悼む歌は、作家の個性表現をなくし、群衆のために作られた歌だつたという。柿本人麻呂が皇子を悼んだ歌は、この群衆のための代作だつたとする。一九二四年の「國文學の發生(第二稿)」では、流離生活をしてゐたほかひたちが、壽詞仕立ての、叙事詩の抒情部分風の發想をしてゐたと言ひ、平安朝には祝師などが呪言を唱へることは村の君の專業ではなくなることから、成年式を経た若者たちが「一時神主」として神に扮し呪言を唱へたと、呪言の理解を通して、まればとの考へまで發展させてゐる。呪言の話は發展していき、一九三三年十月の「柿本人麻呂論—人麻呂歌集の側から見て—」では、「恋」を「靈ごひ」の方式から出たものと見て、「靈ごひ」の儀礼に使つた呪文が、恋歌の内容を作つたと、儀礼から詩作へと發展する変遷を述べてゐる。そして、一九三二年二月の「萬葉集講義—飛鳥・藤原時代—」では、古代の人がたまふりの文句を縮小していった中で短歌が盛んになってくることから、短歌がふりを意味するものだつたと考へてゐる。短歌のほとんどがたまふりの歌であると思へてゐるのだ。一九三四年八月の「唱導文學」が、こうした萬葉の歌と他界観との關係を論ずる

上でのまとめとなっている。山人、山部及びその類の神人の間にあった山の伝承が、詞章を短縮した歌殊に短歌になっていったことについて、神遊詞章の特殊化と言っている。これは、山部宿禰赤人、高市連黒人などは山部に関係している、柿本人麻呂は和邇氏の分派であり、山に関係していることから導いている。山部の小唄は奈良朝かその前に短歌を携行しており、詞章が短縮されて短歌にされたことと、山と関係する詩人のいることを結びつけて考えているのだ。この頃の折口は、山のまればとについて論考を進めており、こうしたものと結びつけて考えようとしている様子が伺える。

四、まとめ

ここまで、折口信夫による柿本人麻呂への言及を通して、その作物や周辺環境への考えについて、主に①折口の柿本人麻呂理解、②折口の柿本人麻呂を通じた他界や呪言の見方、に絞って整理してみた。ここから得られる折口の考え方は以下のようにまとめられる。こうした考え方と見方を通して、折口の民俗の読み解き方法を、引き続き理解していこうと思う。

①折口は一九二六年に、柿本人麻呂が詩形に改革を与えた人物と考えている。それは、人麻呂の長歌にすぐれていただけでなく、短歌をも発展させたことから評価している。最終的に短歌とは、たまふりの文句を縮少した形をもて囃したものだとしている。

②人麻呂の表現について、純粹な譬喩に傾かせていったと評価している。

③人麻呂は藤原の時代に短歌を意識させ、長歌や旋頭歌が作られない時代に、短歌がこれらを整理した。そして、新作の大歌には反歌が付くようになったことなどが、その功績であると言っている。

④一九一六年には山部赤人や家持の力量が劣っていると、評価している。こうした論調が一六四五年には、現在の歌に与えた影響という視点から、歌人の功績を評価しようとする姿勢に変わっている。

⑤来世観や呪詞に歌人の影響があったと考えており、それは一九二〇年に、宮廷歌人が来世観の形成に影響をもたらしていたことを指摘している。一九二二年には来世観を萬葉の譬喩等から探ろうとする姿勢が見られ、来世観がよみの国一つだったのが、大空のひのわかみこの話に移り、倭成す人は死後高天ノ原の生活が続くという見方になっていったことを指摘している。

⑥死者を悼む歌は作家個人のものではなく、群衆のための作物であったことを前提に、一九二四年には、流離生活をしていたほかひが、寿詞仕立ての、叙事詩の抒情部分風の発想をし、平安朝には祝師が呪言を唱えることはなくなり、成年式を経て若者が神に扮し、この役割を担っていることを指摘している。それは、まればとの発生論とも関係する考えである。

⑦一九三二年には短歌のほとんどがたまふりの歌であったと考え、一九三三年には靈ごいについて言及し、恋歌が靈ごひの儀礼から詩作へと発展したものと考えを発展させている。一九三四年になると、山人、山部や神人の間にあった山の伝承が、詞章を短縮して短歌になっていったと考えている。これは、人麻呂をはじめ、赤人、黒人などの出自などから、山に関係していたと考えたことから導き出している。この発想は、この時代、折口が山のまればとへの興味があったことから発展していると考えられる。

最後に、本論の流れに沿って、折口の著作の中から、柿本人麻呂の言及がある著作を時代順に並べてみた。なお、ここに挙げたものは、著作の中の人麻呂に触れている部分のみを見て分類している。また、本文中で使用した著作には重複しているものもある。

折口の柿本人麻呂理解

(一) 柿本人麻呂について

- ・『萬葉集辭典』(一九一九年一月 文會堂書店) 全集六
- ・「相聞の發達」(一九二六年頃草稿) 全集一 五〇二〜五二五頁
- ・「大歌の考察」(一九二八〜一九三〇年度の途中まで慶應義塾大学文学部で講ぜられた「国文学」講義) 全集ノート編二 六八〜七七頁
- ・「雑体ならびに述懐歌―古今和歌集(三)―」(一九二八年から一九三四年まで慶應義塾大学文学部で講ぜられた「国文学」講義のうち、一九三二年度の途中〜一九三三年度の終わりまでの部分) 全集ノート編四 一五五〜一六四頁
- ・「曾根好忠―拾遺和歌集(三)―」(一九二八年から一九三四年まで慶應義塾大学文学部で講ぜられた「国文学」講義のうち、一九三二年度の途中〜一九三三年度の終わりまでの部分) 全集ノート編四 二七七〜二八八頁
- ・「呪歌と比喻歌と―女房歌(二)―」(一九二八年から一九三四年まで慶應義塾大学文学部で講ぜられた「国文学」講義のうち、一九三二年度の途中〜一九三三年度の終わりまでの部分) 全集ノート編四 二七七〜二八八頁
- ・「歌の話」(一九三〇年一月『歌・俳句・諺』アルス社刊日本兒童文庫 六四) 全集一一 六六〜一二六頁

・「短歌の歴史―萬葉から現代まで―」(一九三五年八月七日『大阪毎日新聞』全集一一 五三〇〜五三三頁)

・「家集と物語と」(一九三八年一〜三月『短歌公論』第二卷第一〜三頁(全集一〇) 一八六〜一九五頁)

・「萬葉集の民俗學的研究」(一九三四年二月一六日 上代國文研究会講演 一九三五年五月『上代國文』第二卷第一号) 全集九 五四〇〜五五一頁

・「感謝のことば」(一九四〇年六月四日・八月『齋藤茂吉氏帝國學士院賞受賞祝賀會記錄』全集二八 二四〇〜二四三頁)

・「美しい私學の學問」(一九四八年六月『餘情』第七集) 全集二八 二三一〜二四〇頁

・「日本文學研究法 序説」(一九五一年三月 河出書房『日本文學講座』第八卷) 全集七 四五五〜四九四頁

・「昭和御製と宮廷ぶりの歌」(一九五一年一月 毎日新聞社刊『みやまきりしま』全集二十五 五一五〜五二五頁)

(二) 人麻呂の表現

・「萬葉談義―日竝知皇子尊の宮の舍人等の歌―」(一九〇九年『八少女』第二卷第五号) 全集二九 二六七〜二七五頁

・「萬葉びとの生活」(一九二〇年一月『アララギ』第一三卷第一号) 全集九 二五〜三三頁

・「日本文章の發想法の起り」(一九二六年一月草稿) 全集一 五一六〜五二七頁

・「萬葉集の解題」(一九二六年五月 萬葉集十回講座講演) 全集一 三三六〜三五四頁

- ・「紋景詩の發生」(一九二六年六月『太陽』第三二卷第八号) 全集一四一八〜四五二頁
- ・「萬葉集研究」(一九二八年九月『日本文學講座』第一九卷) 全集一三六九〜四一七頁
- ・「長歌の制作―撰善言司(三)―」(一九二八〜一九三〇年度の途中で慶應義塾大学文学部で講ぜられた「国文学」講義) 全集ノ一ト編二一九三〜二〇三頁
- ・「撰者と誦習者―古事記の成立(二)―」(一九二八〜一九三〇年度の途中で慶應義塾大学文学部で講ぜられた「国文学」講義) 全集ノ一ト編二 二六五〜二七四頁
- ・「長歌と短歌と―短歌の發生(三)―」(一九二八〜一九三〇年度の途中で慶應義塾大学文学部で講ぜられた「国文学」講義) 全集ノ一ト編一 三二二〜三三二頁
- ・「恋愛詩の發達―短歌の發生(四)―」(一九二八〜一九三〇年度の途中で慶應義塾大学文学部で講ぜられた「国文学」講義) 全集ノ一ト編一 三三二〜三三三頁
- ・「国文学概論」(一九三五、一九三八年度慶應義塾大学講義) 全集ノ一ト編一
- ・「古代中世言語論」(一九四〇年三月『國學院雜誌』第四六卷第三号) 全集一九 一八九〜二三三頁
- ・「文學様式の發生」(『日本文學の發生 序説』として底本は一九四七年一〇月齋藤書店から刊行。『日本評論』に書き続けられた論稿と門生の筆記に成る部分を含む) 全集七 一七九〜一九八頁
- ・「聲樂と文學と」(『日本文學の發生 序説』として底本は一九四七年一〇月齋藤書店から刊行。『日本評論』に書き続けられた論稿と門生の筆記に成る部分を含む) 全集七 二二二〜二四一頁
- ・「日本文學の内容」(『日本文學の發生 序説』として底本は一九四七年一〇月齋藤書店から刊行。『日本評論』に書き続けられた論稿と門生の筆記に成る部分を含む) 全集七 三三四〜三六六頁
- ・「日本文學研究の目的」(一九四七年六月一四日 朝日古典講座講演一九四八年二月『三色旗』第九号) 全集七 四四六〜四五四頁
- ・「上世日本の文學」(昭和二四年頃か) 全集一二三三三〜五一一頁
- ・「短歌論」(一九四七年〜一九五二年 慶應義塾大學通信教育部教材及び『主婦之友』の海外版に連載したもの) 全集一四 三八九〜五〇二頁
- (三) 作家の評価と比較
- ・「日記」大正五年五月七日(一九一六年) 全集三一 一〇三〜一〇八頁
- ・「萬葉集私論」(一九一六年九、一〇、十一月、一九一八年四月『アララギ』第九卷第九、一〇、十二号、第十一卷第四号) 全集九 一〜二四
- ・「紋景詩の發生」(一九二六年六月『太陽』第三二卷第八号) 全集一四一八〜四五二頁
- ・「短歌本質成立の時代」(一九二六年二月 土岐善麿氏(編)『萬葉以後』解説) 全集一 二二七〜二六四頁
- ・「短歌の本質と文學性との問題」(一九四五年三月『短歌研究』第二卷第三号) 全集一〇 一九六〜二〇八頁
- ・「短歌本質の成立」(一九三九年一月『國文學論究』第十册) 全集十二〇九〜二二三頁

折口の柿本人麻呂を通じた他界や呪言の見方

・「妣が國へ・常世へ」(一九二〇年五月『國學院雜誌』第二六卷第五号) 全集一 三〇一―三五頁

・「萬葉びとの生活」(一九二二年一月『白鳥』第一号) 全集一 三二一―三三五頁

・「萬葉集のなり立ち」(一九二二年二月『皇國』二七九号) 全集一 三五五―三六八頁

・「國文學の發生(第二稿)」(一九二四年六・八・十月『日光』第一卷第三・五・七号) 全集一 七六―一二三頁

・「古代生活の研究」(一九二五年四月『改造』第七卷第四号) 全集二 一六―四二頁

・「短歌様式の發生に絡んだ或疑念」(一九二五年八月『橄欖』第四卷第八号) 全集一〇 二二四―二二六頁

・「國文學の發生(第四稿)」(一九二七年二・四・十二月『日本文學講座』第三・四・十二卷) 全集一 一二四―一二六頁

・「女房文學から隱者文學へ」(一九二七年九月『隱岐本新古今和歌集』巻首) 全集一 二六五―三二〇頁

・「万葉集卷九―万葉卷別論(四)―」(一九二八年から一九三四年まで慶應義塾大学文学部で講ぜられた「国文学」講義のうち、一九三〇年度の後半―一九三二年度の途中までの部分) 全集ノート編三 二六〇―二七二頁

・「大伴宿禰家持論(二)」(一九二八年から一九三四年まで慶應義塾大学文学部で講ぜられた「国文学」講義のうち、一九三〇年度の後半―一九三二年度の途中までの部分) 全集ノート編三 三〇六―三一四頁

・「大和物語の成立―伊勢ノ御(四)―」(一九二八年から一九三四年ま

で慶應義塾大学文学部で講ぜられた「国文学」講義のうち、一九三二年度の途中―一九三三年度の終わりまでの部分) 全集ノート編四 三三五―三四七頁

・「歌及び歌物語」(一九二九年二月講述。一九三〇年三月『國文學註釋叢書』一五) 全集一〇 一五三―一八五頁

・「柿本人麻呂」(一九三三年二月 春陽堂『萬葉集講座』第一卷) 全集九 四六一―四八四頁

・「萬葉集講義―飛鳥・藤原時代―」(一九三二年二月 改造社『短歌講座』第五卷) 全集九 一〇六―三〇五頁

・「柿本人麻呂論―人麻呂歌集の側から見て―」(一九三三年十月『短歌研究』第二卷第十号) 全集九 四八五―四九三頁

・「萬葉集の研究―一種の形態論として―」(一九三四年五月 改造社『日本文學講座』第六卷) 全集九 六〇―八四頁

・「唱導文學」(一九三四年八月 改造社『日本文學講座』第二卷) 全集七 七三―九九頁

・「歌謡を中心とした王朝の文學」(年月日未詳 長野縣上伊那郡第一部教育會における講義) 全集一二 二六三―三二二頁

・「上代文學解釋法の問題」(一九三五年二月『學苑』第三卷第一二号) 全集二九 三四三―三七五頁

・「相聞歌概説―殊に萬葉集卷二に就いて―」(一九三八年一月『短歌研究』第七卷第一号) 全集九 三四二―三五六頁

・「萬葉集と民俗學」(一九五二年五月三十一日 上代文學會講演一九五四『上代文學』創刊号) 全集九 五五二―五六〇頁

注

1 折口博士記念古代研究所(編)『折口信夫全集』中央公論社(旧全集)を使用した。一部、旧字体を新字体に改めるなどの変更を施した。なお、本稿では読みやすさを考慮し、書誌情報等を示す順序を引用タイトル、発表年、発表元情報、全集収録巻、頁の順に示した。

2 折口は『萬葉集辭典』(一九一九年一月)で、柿本人麻呂について簡潔に解説している。ここから、折口は一九一九年の段階で、万葉集の作者に対する評価を、自己の中である程度完成させていることが指摘できる。以下、この解説を引用する。

『萬葉集辭典』(一九一九年一月)全集六

かきーのーもとーのーひとまる【柿本人麻呂】持統天皇・文武天皇の兩朝に仕へて、駕に従つて、紀伊・伊勢・吉野等に往き、新田部・高市の諸皇子と遊び、近江・石見・筑紫等に任に赴いた事のある宮廷詩人で、晩年は石見國にゐて、其處で死んだ。墓の大和國添上郡にあると言ふのは、古くからの誤である。集中に長歌二十首、短歌八十六首がある。

かきーのーもとーのーひとまるのーしふ【柿本人麻呂集】奈良朝の初期に集められたもので、多分人麻呂以外の人が集めたのだらう。本集中に引いたのみで、實物は傳つてゐない。本集中巻十一には、此集から纏めて引用してあり、其他の諸巻にも引いてあつて、その数は中々多い。此集は非常に字数を儉約して書いてあるので、讀みにくい歌が多い。萬葉集の分類は、此集の分類に負ふところが少くない様である。長歌二首、短歌三百三十六首、旋頭歌三十五首がみえる。

3 岡野弘彦は例え『折口信夫伝』で、折口の万葉集への理解について、『口訳万葉集』編纂にあたり口述筆記させた際のことについて述べている。「三カ月で万葉集全二十巻、四千五百余首を一気に口訳し終った。しかもこの口訳をつづける間じゅう、折口の机の上にはテキストとして使う『日本歌学全集 万葉集』だけしか無かった。(中略)口訳する時にも参考にする注釈書らしいものは何も無

かったのは、貧窮の極にあつたからだ、折口に言わせれば万葉集二十巻、必要なことはすべて頭に入っているということだつたらう。中学三年以来の『言海』も『国歌大観』も読み尽くす読書力と、異能ともいうべき記憶力、殊に歌に対する読みの深さは、口訳の場で遺憾なく發揮されたことになる。それにしても、長歌を含めて一日に五十首以上の訳を、百日近くも述べつづけたのだからさまざま。(一七頁)折口の特別とも言ふべき才能を証言している。ほかに、「折口が万葉歌人の中で高い評価を与え、またその歌が好きであつたのは、万葉の前期では高市黒人、後期では大伴家持であつた。柿本人麻呂は歌によつて違い、宮廷歌人的な作品には高い評価を与えていない。また戦後の一時期に民衆歌人などといって「貧窮問答歌」をはじめ高くもてはやされた山上憶良に対する評価も厳しかった。」(二二頁)と、折口による万葉歌人の評価を述べている。

参考文献

- 岡野弘彦(二〇〇〇)『折口信夫―その思想と学問』中央公論新社
- 折口信夫「鬼の話」(一九二六 三田史學會例會講演筆記)全集三 三〇二頁
- 折口信夫「山のことぶれ」(一九二七年一月『改造』第九卷第一号)全集一 四五九〜四六六頁
- 折口信夫「國文學の發生(第三稿)」(一九二七年十月稿 一九二九年一月『民族』第四卷第二号)全集一 三六二頁
- 折口信夫「鶯替へ神事と山姥」(一九二八年一月二十五日 鶯の會講演 一九二九年一月『江戸文化』第三卷第一号)全集一六 四一七〜四二九頁